

大覚寺大沢池（旧嵯峨院）の調査（3）

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

1984年の調査では名古曽瀧跡から大沢池に連続する遣水の北1/3を検出し、1985年には嵯峨美術短大グラウンドの中央から西側の一帯を調査してきたが、明確な遣水痕跡を検出できなかった。従って本年度は1984年の調査区に一部重複して遣水の南への流水方向を追い、同時にグラウンドの東半部にも調査区を延長して調査を実施した。調査期間は1986年7月14日～8月21日で、調査面積は約360㎡である。

平安時代初頭に名古曽瀧から南流する遣水は途中に池状の溜り（SG 32）を形成し、再び南へ流れていたものと思われるが、その後この池の東西兩岸を埋め、幅約2.5mの遣水（SD 35.45）に改修している。改修後の遣水は兩岸が礫で護岸され、一部景石で修景される。とりわけ東岸には流れを思わせる石組施設（SX 48）があり、1984年検出の東西築地北側溝（SD 28）の延長線上に位置する。その後護岸や石組施設は再び周囲の盛土造成に伴って埋められ、兩岸は新たに礫や景石によって護岸修景される。1984年に検出した石組暗渠（SD 36）は、これらの景石群の隙間から導水するための施設であることが判明した。以上の3時期に分けられる遺構は、いずれも遅くとも15～16世紀には埋められている。

グラウンド東半部の調査区では、蛇行する幅約5～7m、深さ約0.8mの溝（SD 43）を検出し、埋土から平安時代の緑釉土師器や陶器が出土した。岸の勾配は緩やかだが、州浜状の護岸施設もなく遣水としての体裁は整えていない。しかし、遣水が蛇行しているのだとすれば流水方向は妥当であり、両者の連続状況が判明する事を今後の調査に期待したい。

（田中哲雄・本中 真）